異国の丘（源　八岳）

誰が　唱うか　遥かに　聞ゆ　異国の　丘
哀調　綿々　望郷の　情
北風に　身を　削る　同胞の　歌
烏拉　山辺　日没の　天
耐え　忍んで　斃るる　なかれ　異国の　丘に
故郷の　肉身　君を　待つ　事　久しと
友を　励まし　又も　唱う　異国の　丘
歌声は　天に　通じて　鬼神をも　泣かしむ

作者　源八岳は日本詩吟学院創始者・木村岳風。独自の岳風流を起こし生涯吟道の普及に努めた。

解説　シベリア抑留の兵士の間で歌われていた日本の歌謡曲の楽曲をテーマに書かれた詩。作詞・増田幸治（佐伯孝夫補詞）、作曲・吉田正。

語釈　※シベリア抑留＝第二次世界大戦の終戦後、投降した日本軍捕虜らが、ソビエト連邦によって主に労働力として移送隔離され、長期にわたる抑留生活と奴隷的強制労働により多数の人的被害を生じたことに対する呼称である。※異国丘＝ソビエト連邦領内のおよそウラル山脈分水嶺以東の北アジア地域。※哀調＝詩・歌・音楽などにただようもの悲しい調子。※綿々＝長く続いて絶えないさま。※望郷情＝故郷をなつかしく思うこと。※北風＝北の方角から吹いてくる冷たい風。※同胞＝　同じ国土に生まれた人々。同じ国民。また、同じ民族。※烏拉山＝ソビエト連邦を南北に縦断する山脈。※鬼神＝超人的な能力を持つ存在の総称。

通釈　シベリア抑留のさなか、誰が歌うのか異国の丘の歌が聞こえる。もの悲しい楽曲で故郷、日本への帰国の情が綿々と湧いてくる。この歌は寒いソビエトの北風に曝されながら身を削った同胞の歌でもある。ウラル山の日没後の風の寒さと労働の辛さを堪え忍び、帰国するまではこのような地で斃れてはならない。日本の肉親が君の帰国を待ち望んでいる。友を励ましながら聞くこの歌は天に通じて、鬼神をも泣かしむるであろう。